

# 直言

サイゴン陥落以来、はや二カ  
月が過ぎた。解放後の変革が徐  
徐に進んでいる様子が伝えられ  
るなかで、民衆の生活苦が解放  
前よりも深まり、民衆のなかか  
ら遠和感や失望感も出ていると  
の報道もあって、

前途の多難を思わ  
せる。このような  
報道に接するたび  
に、煽国して行っ  
たかつての留學生  
はどうなったか

うかとか、私の昨春のサイゴン  
訪問のときに膨大な量の研究資  
料を学術交流のためにといて  
無料でコピーしてくれた国立函  
書館長はどうしているだろう  
か、といった懐懐に舞われる。  
そしてななかで、サイゴン解

放の、そしてベトナム戦争全体  
の中核が民族解放戦線ではな  
く、ベトナム労働党にこそあつ  
たことがますます明らかになつ  
てきた。つまり、多くの日本人  
の解釈とは異なつて彼らにとつ  
ては、民族解放であるよりは革

そして、四九年十月に中華  
人民共和国を樹立し、中国本土  
の解放を遂げてから二カ月余り  
経過したとき、毛沢東は、スタ  
ーリンとの会見のためにモスク  
ワを訪れた。スターリンにとつ  
て中国革命の勝利は、タテマエ

## 北京の憂鬱

なか  
じま  
みね  
お  
中嶋 嶺雄

二カ月半も国を留守にせざるを  
得なかつたのである。  
この点でも、今日の北京とハ  
ノイの関係は、当時のモスクワ  
と北京の関係に似ている。この  
ことを思わせる兆候は、すでに  
数多いが、ベトナム労働党は、  
「農村から都市を包囲する」「毛  
沢東戦略を排し、正規軍によつ  
て都市を直撃したことが勝利に  
つながつたと明らかに語って  
もいる。

命であつたことが明白になつた  
のである。

としては当然大歓迎すべきもの  
であつたが、ホンネとしては、

この点で、七三年のバリ協定  
以後のベトナム戦争は、四六  
年以降の中国の国共内戦と歴

史的な同質性をもつといふよ  
う。同盟条約交渉ははやくも離航を  
つづけ、毛沢東は、建國早々、

北京が最近、マレーシアやタ  
イ、インドネシアなどの毛沢東  
主義者への支援を再開したの  
は、ベトナムの勝利がもたらし  
た北京の憂鬱と関連しているの  
かもしれない。

(東京外大助教授)